



ハピネスピロー



川路 新吉

ハピネスピロー

「今おかえりですか」

家までもう少しというところで、隣に住む博士に声をかけられた。

人当たりの良い老紳士で、技術者として会社勤めして、定年退職した今では自宅で発明活動にいそんでいるとのことだった。

そういうこともあって、この近所に住む人々は彼のことを愛着を持って博士と呼んでいた。

「博士はご散歩ですか」

「実は新しい発明品が完成したんですよ」

博士はそう言うと、手にさげていた紙袋から小さいクッションのようなものを取り出した。どうやら、これを見せたくて私の帰りを待っていたようだ。

「今度はなにを発明したんですか」

「題してハピネスピローです」

博士が手渡したので、受け取ってまじまじと見てみるが、それはとりたてて変わったところはない普通の枕だった。

「これは、枕ですか？」

「ええ、人生を充実させてくれる枕です」

「いったどんなものなんですか？」

「それはつかってみるのが一番でしょう。よろしかったら差し上げましょう」

「ただいま」

ネクタイをはずしながらリビングに入ると、キッチンではちょうど妻が夕飯をつくっているところだった。

「おかえりなさい、あらなにその紙袋」

「ああ、また博士に発明品もらっちゃったよ」

妻は、また？と笑った。

「なんでも人生が充実する枕らしいよ」

ふーんと妻は気のないあいづちをうった。あまり興味はないらしい。

「あ、ごはんもうちょっと待ってくれる？」

妻はせわしなくキッチンで働いている。鼻歌を奏でながら皿に料理を盛り付けしている。

私とその様子を眺めていたら、それに気づいて妻は、なぁに、と笑った。

「冷蔵庫におつまみつくってあるから先にいっぱいやってて」

冷蔵庫からつまみとビールを取り出す。

つまみはトマトとモッツァレラチーズのサラダ、私の好物だった。

テーブルにつまみとビールを置き、ソファに座る。同時にテレビの電源を入れた。ちょうど日

本シリーズをやっているところだった。

その様子を見て妻が言った。

「なんだか、ザ・お父さんって感じね」

「ザ・お父さん？」

「うん。ビール片手に野球観戦」

「ああ、そういえばそうだな。ザ・昭和の父親。ちょっとおつまみがハイカラだけどね」

「ハイカラって」

私の言葉がよほど気に入ったのか、それからしばらく妻はハイカラハイカラと楽しそうにつぶやいていた。

幸せだな。

トマトとチーズを一緒にほおぼる。サラダは相変わらず美味しかった。

妻の手料理を待つ間、テレビを眺めていた。

それは、テレビのなかでパ・リーグの打者がヒットを打ったときだった。

胸が苦しい。そう気づいた次の瞬間、我慢ができないほどの痛みが襲ってきた。

こらえきれず手にしていたビールのグラスを落としてしまう。グラスの落ちる耳障りな音で妻が気づいた。

「どうしたのあなた」

大丈夫、とこたえようと思うのだけれど、のどに力が入らず、ただ息が漏れるだけだった。

「あなた」

妻の悲壮な声が聞こえてくる。

死ぬのかな。私はそう覚悟した。

「あなた大丈夫？うなされてたわよ」

目を開けると、そこには心配そうに見つめる妻の顔があった。

また、あの夢だった。

博士にもらった枕をつかうといつもこの夢を見る。詳細はそのたびに違うのだけれど、大まかなあらすじはいつも一緒。幸福につつまれた状況で自分が死んでしまうという夢。それが本当の現実と区別がつかないほどリアリティをもって再生される。

どうやら妻も、原因が枕にあるらしいと気づいているようだ。

「博士に返してくれば？その枕。失敗作でしたよって」

口調はふざけたようにしているが私の身を心配してくれているのを感じる。

「大丈夫だよ」

私は妻の頭を抱き寄せた。

「愛してるよ」

ほとんど無意識に口から出ていた。

それを聞いた妻は、なに言ってるのと照れた様子で朝食の支度をしにベッドからでていった。

今ある幸せがいつまでも続くとは限らない、明日にもそれは終わってしまうかも知れない。そ

れを気づかせる。

人生を充実させる枕とは結局そういう仕掛けだった。やり口は強引だけれど、確かに効果はある。だから私は、月に一回こうしてこの枕をつかって寝ることにしている。

ただ、妻をあまり心配させるのもかわいそうだ。夢の内容がもうすこしマイルドにならないか博士に相談してみよう。

ハピネスピロー

<http://p.booklog.jp/book/39563>

著者：川路 新吉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bowmoq/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39563>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39563>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.